

## イメージと表現 ―学生自由画を通して―

長 根 利紀代

はじめに

I 研究目的―保育者に求められる表現能力の育成

II 研究方法

―学生の描画による表現能力の現状把握と事物の見直しについての調査

III 結果と考察

―事物に対する学生自らのイメージと表現への気づき及び学生指導の課題

おわりに

## はじめに

近年の社会変化により子どもたちの生活環境は大きく様変わりし、子どもの発達を支える保育現場や保育者への期待がますます高まっている。保育者養成においても、学生生活環境及び生活体験も変化していることを踏まえて、社会に求められる保育者の養成に取り組んでいる。

平成元年に改定された教育要領では保育者の役割が強調され、園生活を通しての子どもの環境的存在として重要な意味がもたされている。現代の人間関係の希薄な時代にあって、子どもと共に生活していく存在としての保育者の資質や保育観は子どもの発達に大きな影響を与え、具体的で感動的な体験が十分とは言えない子どもたちにとって、豊かな感性と表現力を身に付けた保育者との出会いはぜひとも望まれるものであろう。

教育要領の領域「表現」においては、「ねらい」として「1 色々なものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ」「2 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」「3 生活の中でイメージを豊かにし、さまざまな表現を楽しむ」とある。表現は子どもたちが生活の中でさまざまなものと出会い、感じたり思ったりした心の動きである。それは、身近な環境と関わりながら感覚を通してイメージとして蓄積され表現の内容となる。イメージは具体的で感動的な体験を通すことからより豊かに鮮明になっていき、子どもの表現

意欲に促されてその子なりの方法によって表現される。そして、そこからさらに豊かな感性の育ちも期待できるのである。従って、表現の豊かさは子どものさまざまな体験と感性によって子どもの心の内面が豊かに育つことが大切となる。園生活でのさまざまな表現活動はイメージを思い浮かべることから始まり、身近な自然や事物との出会いを通しての具体的で直接的な体験を通して子どもたちの心に感動を呼び、生き生きとした活動として展開される。しかし、子どもは体験したものがそのまま豊かな表現に結びつくものとは限らず、時には周りの大人が援助し、子どもが考えたり感じたりしたものを支えその子なりのイメージを外面に表わしだせるよう配慮しながら表現する力を育てる必要がある。そのため保育者は、子どもの生活そのものや行動の理解者、また、共同作業者となり、子どもと共感、共鳴し、活動の楽しさを共有する中で子どもたちを引きつけ遊びの活性化や発展を促すなどモデルや遊びの援助者とならなければならない。このように、保育者は子どもの主体的な活動を通してその子なりの発達を支えるため、それぞれの活動の場面に応じたさまざまな役割を果たすことが求められている。表現には互いに表現し合い受けとめ合う子ども同士や子どもと保育者との相互関係の成立していくことが重要となる。子どもや保育者の活動には表現する個々の人間の個性が表れ、園生活ではクラスにも担任

カラーがみられたりすることから、保育者の日常生活の在り方や価値感が問われることになる。以上のような点から、保育者をめざす学生の豊かな表現能力の育ちを支援するために、学生の表現の現状を調査すると共に、学生の主体的な学習態度を引き出す授業の在り方を探り、今後に求められる保育者としての資質向上に向けて学生指導の一助としたい。

## I 研究目的

保育における大切な教育環境として学生を考えると、授業や実習を通して選択する教材や手づくり作品など、単純でアニメチックな表現をよるこび、簡略したものに対して「かわいい」と評価し好む傾向が強いことに注目した。現場の教育環境には保育者の意図が込められ、子どもたちが園生活の多くを過ごす保育室の壁面や窓ガラス、天井などのかざりつけ、そして、手作り教材も、大切な保育環境の一つとしての教育的意味をもっている。子どもの発達の援助者、人的環境として、また、自らも表現者として活動することを考えると、こうした学生の表現や事物への評価は、実物を把握した上での選択であり、子どもの発達を考慮した表現であることが望まれる。そこで、学生の事物を捉える視点や価値観などから学生の保育者としての表現能力を問い直す必要があると考えたことから、本研究では、学生の絵画を取り上げ、その中にみる学生の資質の現状と保育者としての学生の表現能力を把握すると共に、学生自らが自分の能力や価値観、保育における事物の表現方法などに気づき、自らの資質向上に向かう手がかりとなることを目的とする。

## II 研究方法

学生の表現力の現状を把握と学生自らによる事物の見直しの機会として、2か回の授業の中で学生自由画を取り上げた。そこで、学生のありのままの表現力を形にするため、授業の流れをつかって学生ができるだけ自然態で自由に絵を描けるようにした後、その作品を回収した。次に、作品に取り上げた対象物について、実物、あるいは実物に近いものに触れたり、観察したりするよう指示した(第1回目)。翌週の授業では対象物の観

察を踏まえ、できるだけ前回と同じ対象物を再度取り上げて絵を描いた後、感想をつけて提出するよう指導した(第2回目)。そこで、その2作品を整理し、対象物の分類、2作品の比較、感想の内容をまとめるなどから考察を試みた。ここで大切にしたのは、学生が自分のもっているありのままの事物へのイメージや表現の形に気づくことであり、イメージして描いたあと改めてその事物を見直すことから、自らの価値観や能力を自覚できることを期待したことである。従って実物を見ながら写生することではなく、自分のイメージをいったん形に表わした後、その実物を見たり、触れたりすることでそのものに対するイメージや観察の視点の変化について学生自らが気づけるように配慮したことである。

### 1 研究対象及び期間

研究対象—1999年度1年生173名  
(作品173組)

研究期間—1999年11月

### 2 授業方法

第1回目—学生にあらかじめクレヨンを持参を指示しておき、当日は提出を予告せず不要プリント紙B4サイズの裏を使って自由に絵を描くようにした。作品完成後に記名と提出を指示し回収した。所用時間は学生の様子を見て20分程とした。そして、次の授業までに今回描いたものについてできるだけ実物に触れてくる。触れられない場合は写真・絵画・文献などの実物に近いものをよく観察し、再度絵を描くことを予告した。

第2回目—第1回目とできるだけ同じテーマで絵を描くよう促した。学生は前回と異なり、あらかじめ提出を予想して活動した。所用時間は前回と同じとし、紙は未使用の印刷紙で材質やサイズは前回と同様とした。学生は前回の対象物の中から実物が観察できたものや描

きやすいと思うものなどを選択して描いていたり、前回到忠実に全て描こうとする姿が見られた。提出の際にはこの活動についての感想を添えることとした。

### Ⅲ 結果と考察

学生が描いた絵は、その対象物によって分類し、さらに各分類した内容を項目別に整理した。第1回目の絵は提出を予期しなかったことから、意味もなく思いついたままを描いている傾向が強く、用紙一枚の中に動植物などいりまぜて描いているものが目立つ。第2回目のものは前回の描画の内より観察できたものや描きやすいと思われたものなどを選択して取り上げている。

#### 1 描かれた対象物の分類と内訳

(複数回答で358例とした)

##### (1) 対象物全体の分類

全体的な内訳は、対象物として取り上げられたものを多い順に並べ、動物34.9%、自然物34.6%、食べ物21.2%、人2.5%、キャラクター2.5%、乗物1.1%となる。しかし、特に第1回目の作品はこれらの対象物が1枚の紙の中に混在しているものも多い。(図1・表1)次に取り上げられた数の多い順に従い、上位3項目「動物」「自然物」「食べ物」について内容をさらに詳しく分類する。

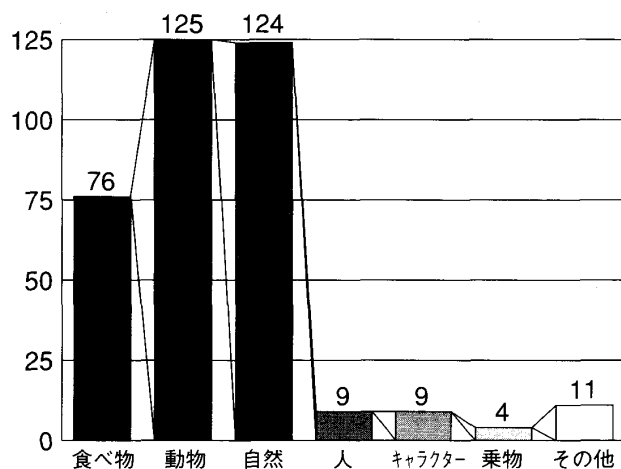


図1 学生の絵画対象物

表1 学生が描いた絵の対象物一覧

動物	うさぎ、熊、ちょうちょ、キリン、犬、猫、ライオン、象、パンダ、さる、たぬき、きつね、鳥、りす、牛、魚、かめ、カエル、イルカ、タコ、くじら、ヒヨコ、アヒル
食物	人参、いも、栗、納豆、ケーキ、桃、なし、パイナップル、西瓜、バナナ、リンゴ、みかん、柚子、さくらんぼ、メロン、いちご、ソフトクリーム、ぶどう、柿、トマト
自然	海、山、岩、地面、太陽、空、星、月、雲、雷、草、木、花
人	子ども、おじいちゃん
乗物	車、自転車
その他	キティー、アンパンマン、ピングー、ドラエモン、仮面ライダー、オバQ、天使、雪ダルマ、宇宙人、家
花	ひまわり、コスモス、チューリップ、すすき、オオイヌフグリ、さくら、たんぽぽ、デイジー、ナデシコ

##### (2) 項目毎の内訳

###### ①「動物」について

「動物」では、取り上げられた数の多い順にうさぎ、熊、ちょうちょ、魚、キリン、犬、猫、象、鳥、ライオンとなる。こうしてみるとここで取り上げられたものはいずれも学生の生活の中でさまざまな方法で身近に触れたり見聞きするものが主になっており、1位となった「うさぎ」を取り上げた学生は41名で、描かれた「動物」の32.8%を占めている。ここで注目されるのは第1回目の「動物」の多くは、概念的で擬人化されたものが見受けられることである。(図2)

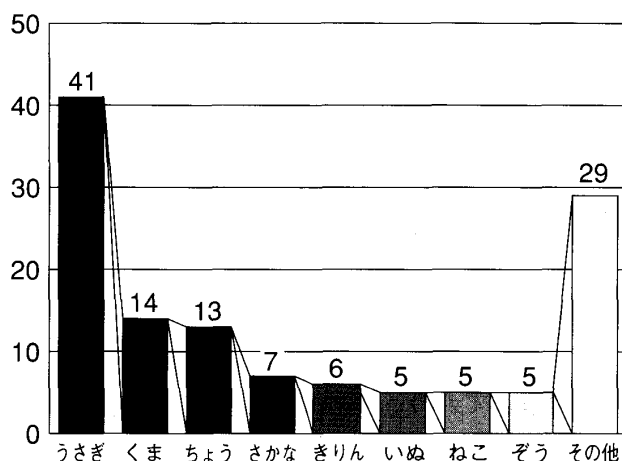


図2 動物

## ②「自然物」について

「自然物」を対象にしたものの分類は、多い順に花、太陽、木、海、雲、月などとなっている。

自然物を描いたものの中では「花」を取り上げたものが66名と一番多く自然物全体の53.2%となる。(図3) さらに、その中で「チューリップ」を描いたものが27名で「花」の内の40.9%と半数に迫る数となっている。ここで描かれた「チューリップ」以外の「花」は名前の判別できないものやかろうじてできても想像的・概念的な表現となっている。(図4)

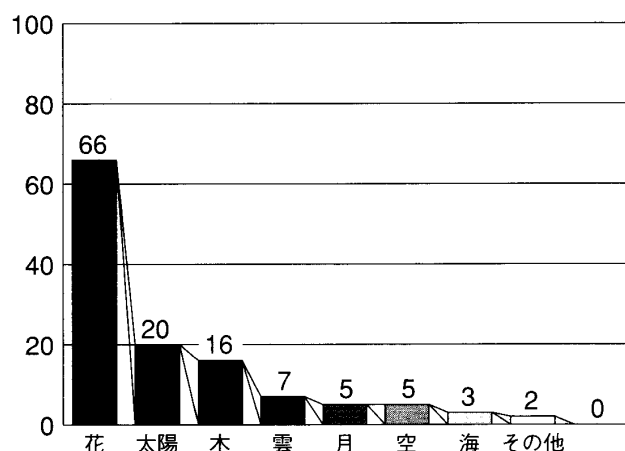


図3 自然物

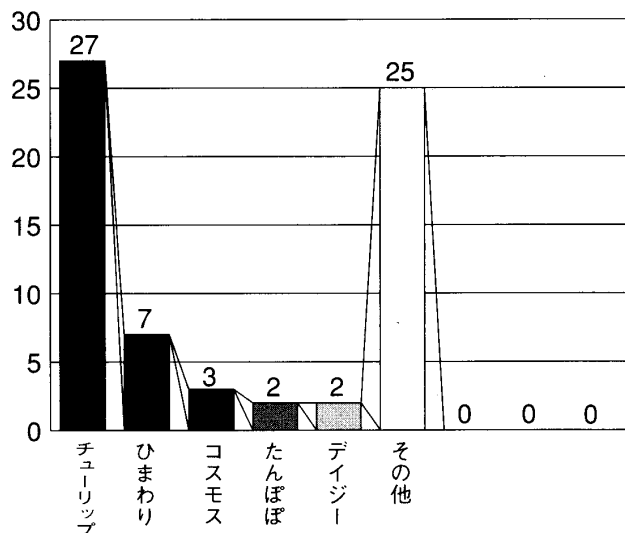


図4 花

## ③「食べ物」について

「食べ物」を対象にしたものでは果物が多く取り上げられており、多い順にリンゴ、みかん、ぶどう、バナナ、イチゴ、メロン、野菜では人参、栗、すいかと続いている。ここで1位のリンゴは17名

で「食べ物」全体の22.4%、2位みかんは12名の15.8%となる。(図5)

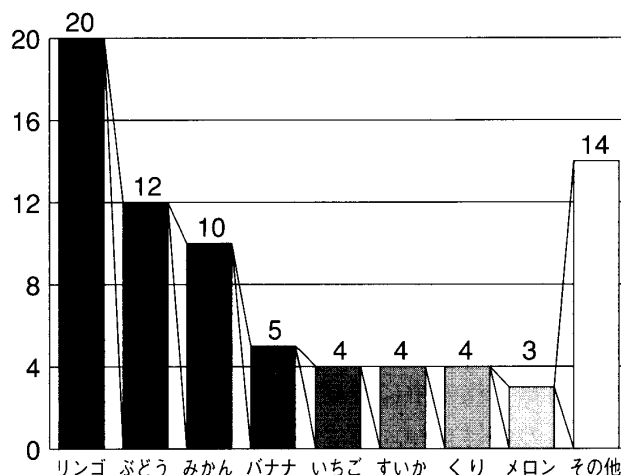
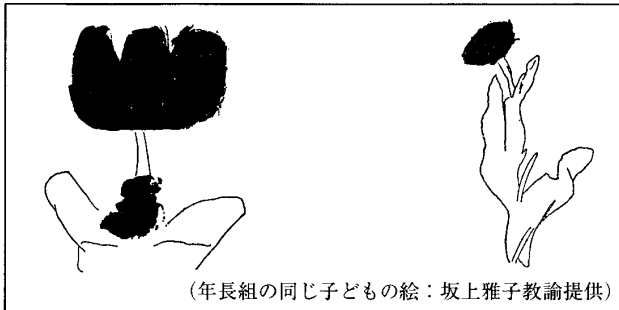


図5 食べ物

学生のさまざまな絵画を通して表現の傾向を見ると、気楽に描くものについては全体的にマンガチックな擬人化されたものが目立ち、想像上のイメージに偏っている。しかし、対象物を観察した後では細かな点に気づき自分の持っていたイメージや概念、知識との違いが認められる。また、こうした傾向の学生の表現には保育者を目指している立場として幼児を意識していることも考えられる。それは、幼児に与えるものは簡略で幼稚なものがふさわしいと受けとめられている学生の感覚的な発想によるものと考えられるのではないかな。この点は保育現場における教材選択の視点やさまざまな場面における作品、書類など、幼児に与える表現全般に見受けられる。

発達心理学において西野らは、「チューリップの絵」について、幼稚園や保育所、家庭で大人が子どもに与えるものは「図6」のような表現となることが多いとして「こんなチューリップをみると、そこに不思議にも大人は何か子どもらしささえ感じるのである。—中略—恐らく子どもには、このあたりで十分なのではという、大人側の暗黙の了解があるのかもしれない。」と述べ、こうした形がチューリップの形を代表している現状を指摘している。そして、子どもの知覚の発達には早い時期から始まり、「わかる」ことの出発点が「知覚」であることなどから、子どもが実物を写実的に見ようとするものの必要性を上げ、現実離れたこ

うしたものから「見ることの指導」を見直す必要性があり、大人が用いる表現方法を獲得させる前に「もっと鋭く観察する目と心を育ててほしい」と述べている。<sup>(1)</sup>



(年長組の同じ子どもの絵：坂上雅子教諭提供)

図6 子どもの描いたチューリップ  
(乳幼児発達心理学より)

そこで、こうした点について学生が表現した「チューリップ」の絵について考察する。

## 2 学生の絵画表現について

### (1) 「チューリップ」の表現について

「チューリップ」の絵については、その100%が3つの三角を連ねたもので、赤色が目立ち擬人化して顔を描いたものもある。また、赤・白・黄色を並べたり幼児の概念画のように家や木と共に風景の中に描かれているものも多い。ここでは西野らが指摘しているような幼児を意識した表現として学生が描いたものか、学生自身の表現能力であるのか明確でない。そこで、第2回目のものを観察するとほぼ100%の学生が色も形も全体的に実物を写生したものに近ずいている。花の膨らみや丸み、花卉や葉それぞれの形に違いが見られ色使いも複数が目立ち輪郭や塗り方にも工夫が見られる。花卉が3枚のものはあるが、単純な三角のみのものは見られなくなった。その中で白い花を輪郭なしで描いてあるものが見られることに表現能力の点から注目される。

「チューリップ」に見られるこうした傾向をさらに学生が取り上げた数の多いものから動物の「うさぎ」と食べ物「りんご」についても考察を進める。

### (2) 「うさぎ」の表現について

第1回目の「うさぎ」はマンガや子どもの絵本、雑誌のイラストレーションにみられるような描写が目立ち、「うさぎ」を描いた41名の学生の内、正面から描き2本足で立った表現が97.6%で洋服を着るなど擬人化されたものとなっている。また、色使いをオレンジやピンクなど表現し、ピンクで描く学生は31名で「うさぎ」を描いた学生の75.6%となる。しかし、第2回目の作品は色も茶系統や白、黒、グレーを使い横向きで四つん這いに描いたものが多く線も複雑になっている。やはりここでも白で描いたものは輪郭のないものがあり形が判別しにくい。また、前回顔のみだったものも体を描いた学生が増加した。

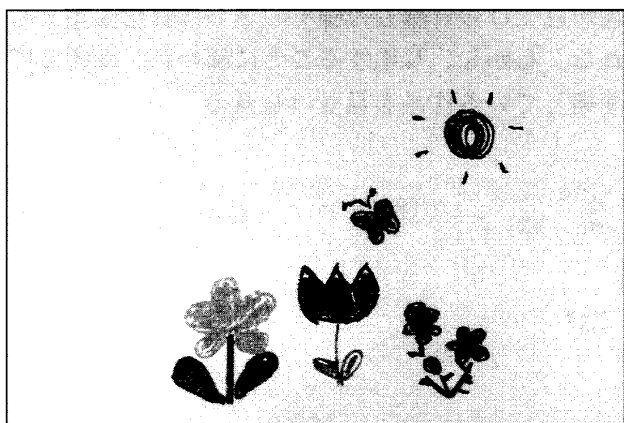
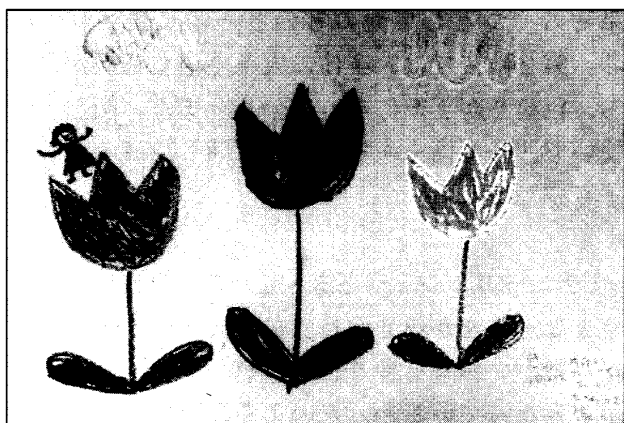
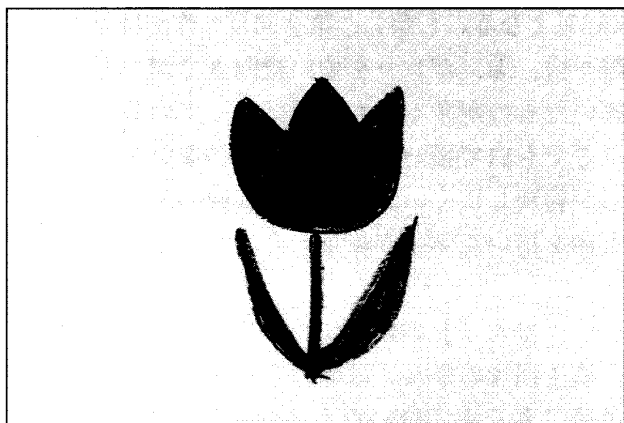
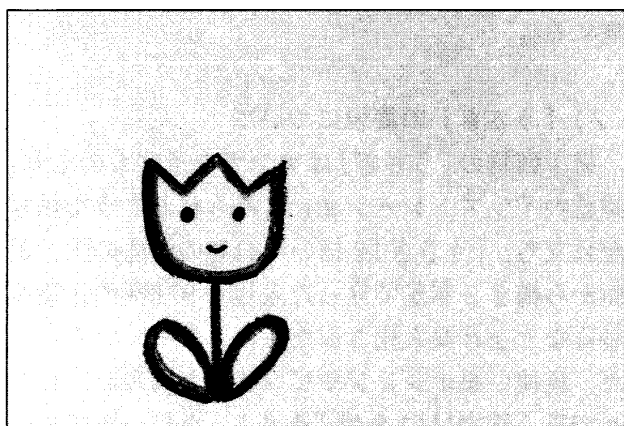
### (3) 「りんご」の表現について

第1回目のりんごは線画もみられ、全体にただ単純に丸く赤で描いたものが主流である。また、果物の一つとして他のものと一緒に描かれている。第2回目では、全体に大きく描く傾向が目立ち、色塗りが丁寧になっている。また、複数の色使いで凹凸や傷を表現したり、熟し加減などの様子も感じ取れる。

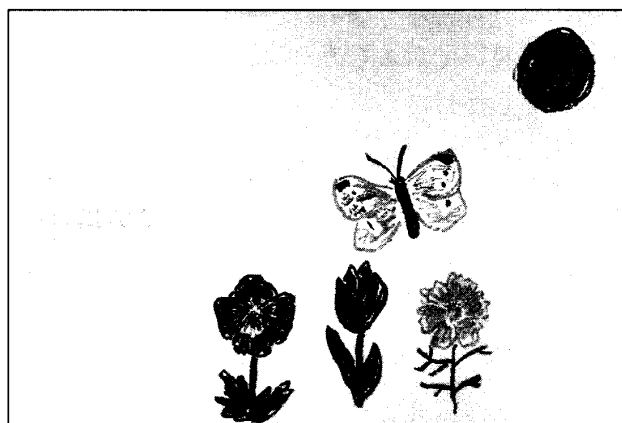
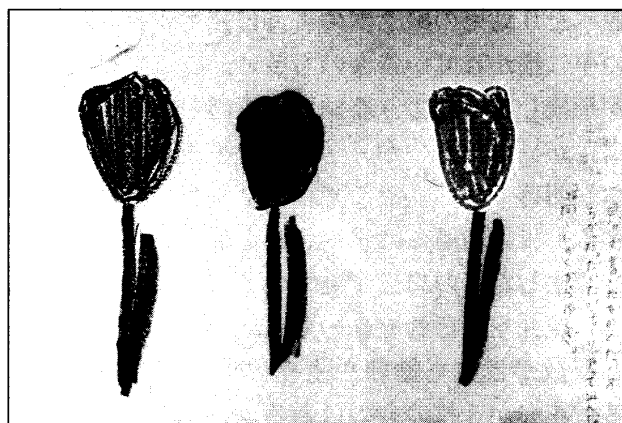
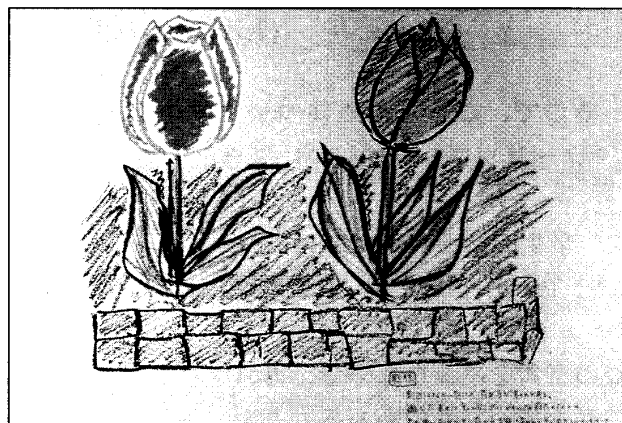
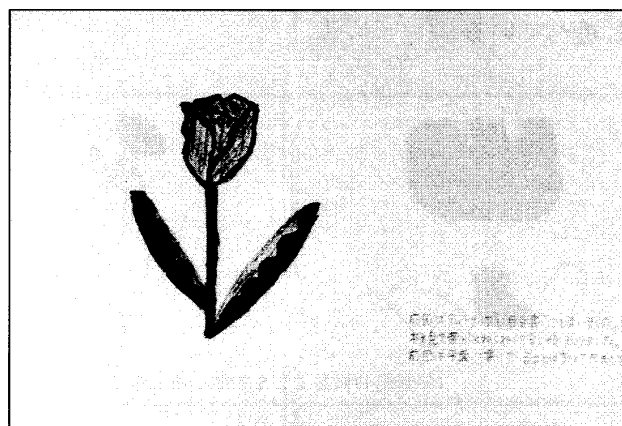
「チューリップ・うさぎ・りんご」の他にもさまざまな対象物が第2回目になると明確な視点で描かれ細かい描写も多く、立体感がある。また、何がどうなっているか、どのように描くかという意志が見受けられ線も力強く、さらに自信も感じられる。しかし、写生することに捕われ、かえって萎縮している作品も見受けられる。

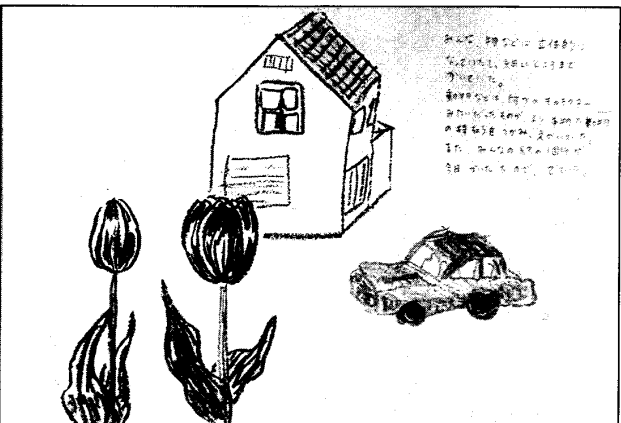
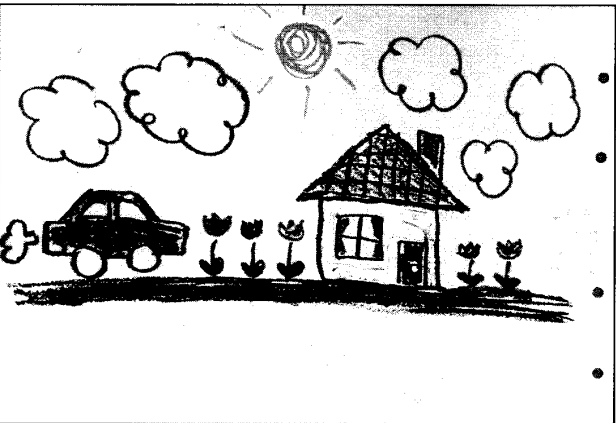
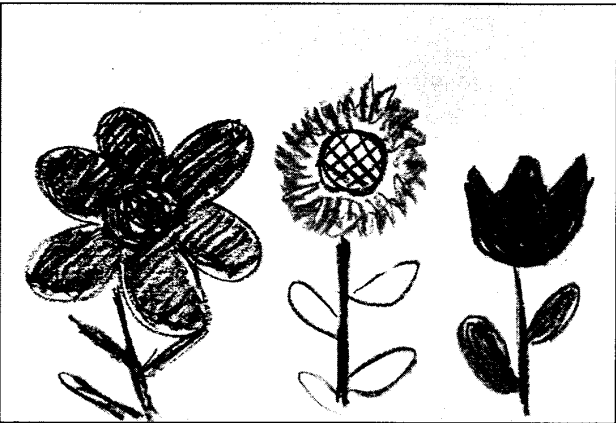
学生作品  
「チューリップ」

第1回目



第2回目

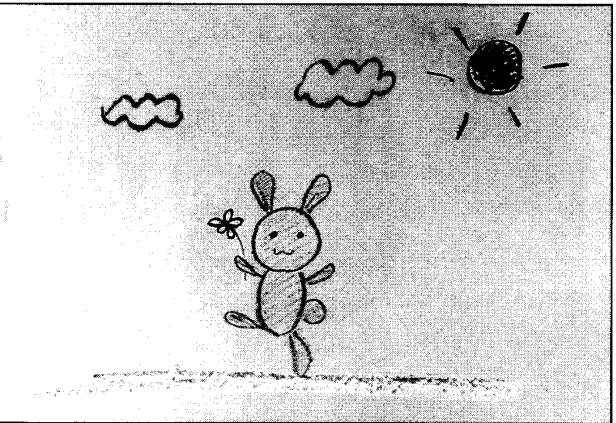
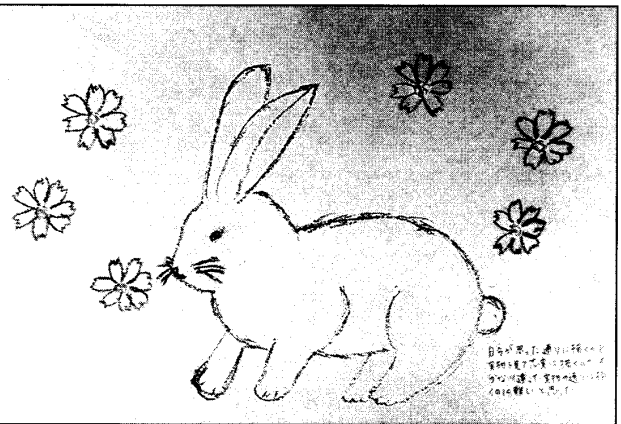
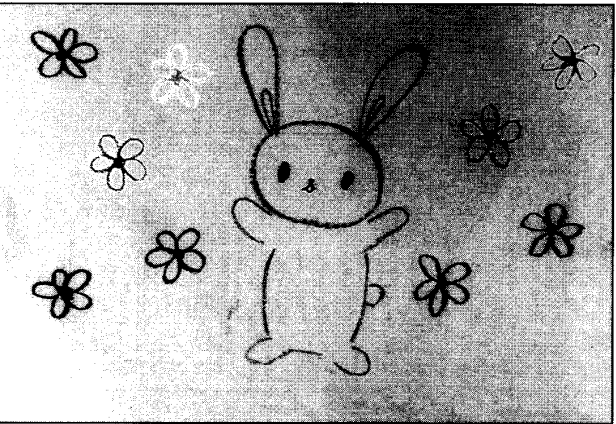




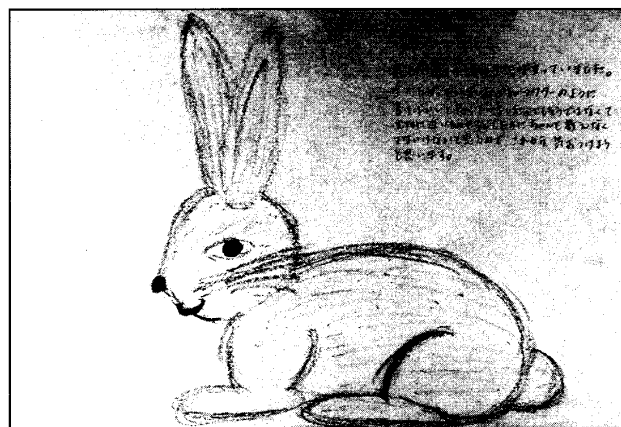
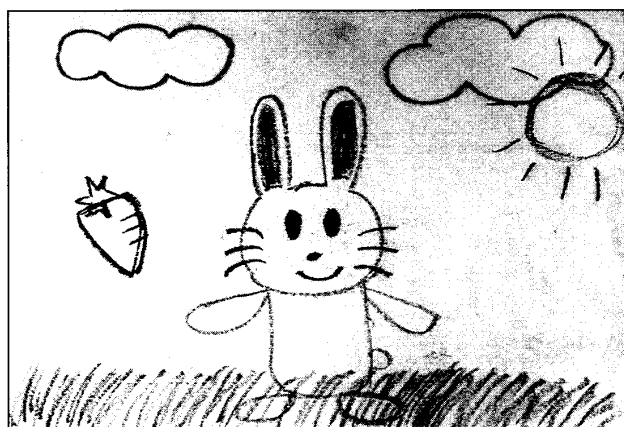
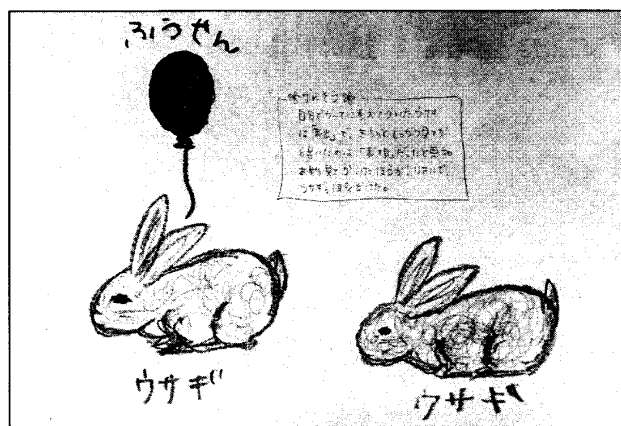
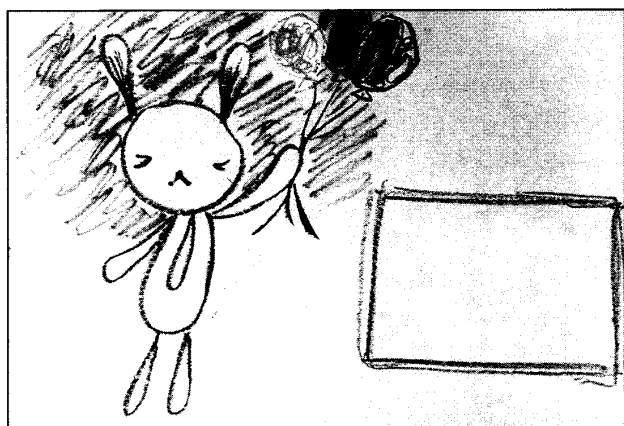
「うさぎ」

第1回目

第2回目

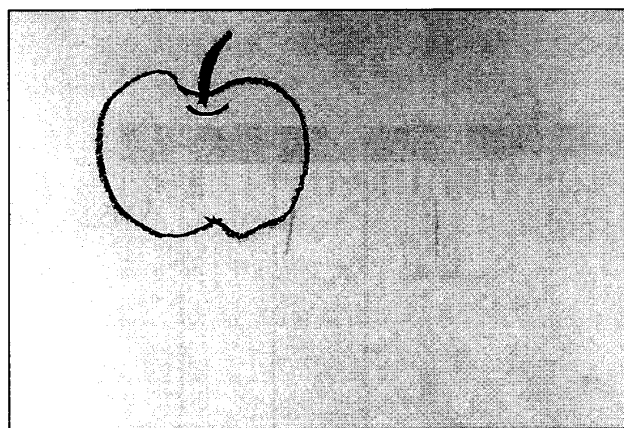




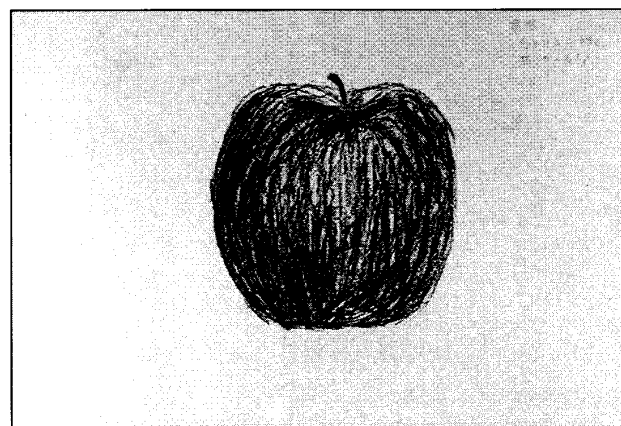
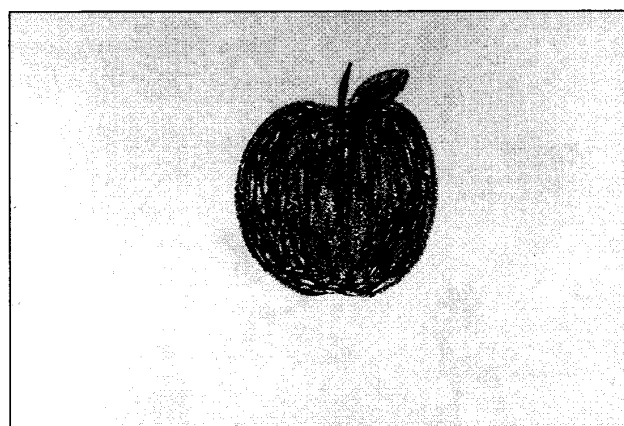
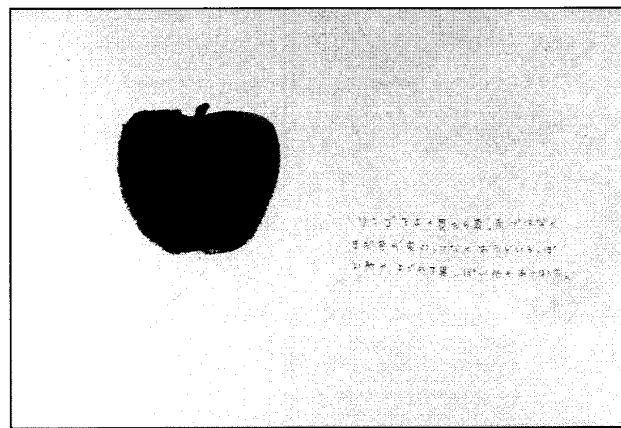


「りんご」

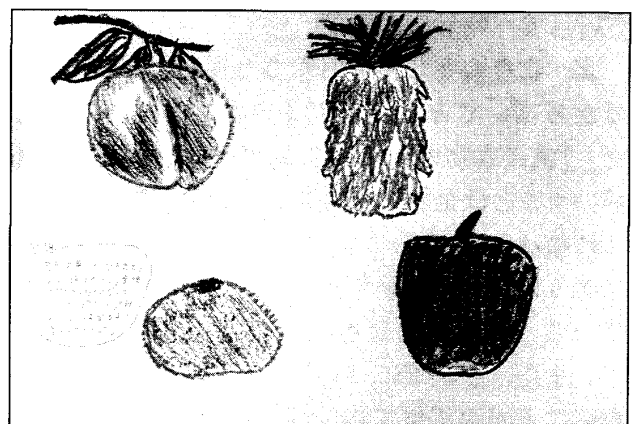
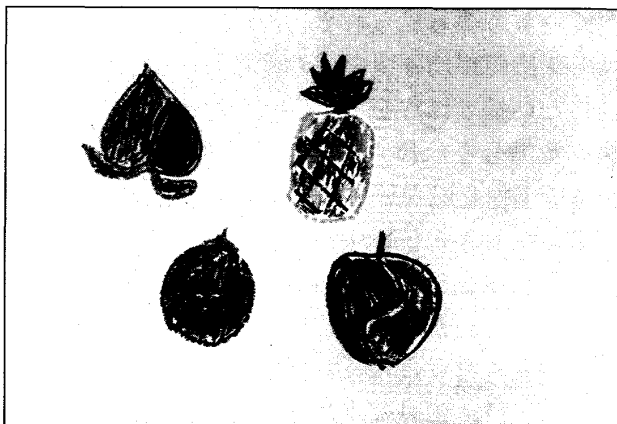
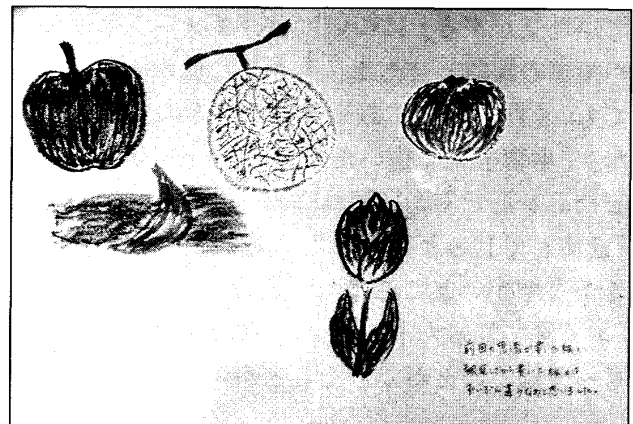
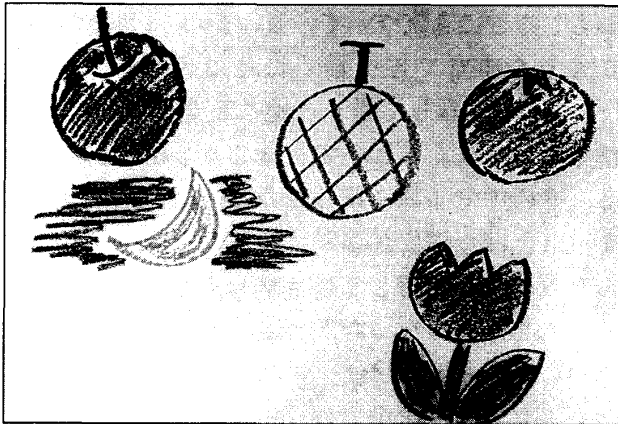
第1回目



第2回目







以上のような結果について考えると、当初からこの課題には、学生の絵画に対してただ写生や正確さを求めたのではない。むしろ「本物を観察する」ことから、自らのもっていた物事へのイメージや表現の在り方に気づき、保育者としての観察力や表現力の見直しを期待したい。そこでさらに、こうした2度の絵画を通して学生が自らの表現についてどのような印象を持ったのかについて、第2回目の作品に添えられた感想文から考察を進めたい。

### 3 学生の「感想」から(資料参照)

#### (1)「自然物」について

自然物の中から、特に花について取り上げると「本物の花にはいろんな種類がある」「花卉がざらざらしていた」「木ひとつでもこんなに違うので先週の絵を見ておもしろかった」と体験的に気づいたことが示されている。「チューリップ」においては「図鑑で見たらいろんな種類のチューリップがあり花の色が一色ではなかった」「自分で描いていたものとだいぶ違った。チューリップってみんなが同じに描くから不思議」「花卉が何枚も重

なっていた」「本を見て葉がくねくねしていることを知った」「調べた本ではみんな花壇などの土の中から生えていた」「前は平面に描いていることに気がついた」「キャラクターのように描けばいいと思っていたが実物に近いものを子どもたちにちゃんと教えないといけないと思うのでこれからは気をつける」など、幼稚だが素直な感想が並んでいる。

#### (2)「動物に」について

感想文全体の中で描く難しさを記述したものが「動物」に最も多くみられる。「うさぎ」では「前回のは自分の中でイメージを勝手に考えて描いた空想」「本物を見たのは小学校の時が最後」「いつも正面から平面的に描くがリアルに横から立体的に描くとすごく難しく描けそうで描けない。何か違和感がある」「うさぎの耳は顔にくっついてることが多いと言うことを発見した」「うさぎをいつからピンクで描いていたんだろう」などと述べている。また、「見てきたものを描くと言うのはとても難しいと感じた。それに思い出しながら描いていてもやっぱり自分の想像の絵になっ

ていた気がする」については、イメージと表現への指導の課題と言える。しかし、他の動物についても、「自分の中にある動物たちとの違いに驚いた」「本物を見て描いたものはやっぱり上手い」、また、身近で実物に触れられる「猫」については「意識してじっと観察したら目の上にもヒゲがあるなど細かいところまで見えた」と述べるなど、「よく見て知った」ことから新たな発見や自信をもって描くことができたことも示されている。

### (3) 「食べ物」について

食べ物を観察して描いたことから「栗を観察してから描いてみると前回よりおいしそうに描けた」「実際本物のケーキを見て描いたら想像して描いたのとは全然違っていて前回よりもおいしそうに描けた」、さらにリンゴでは「ものすごくおいしそうに描けた。絵を描くのって楽しいな」と見ているうちに感じたものが描画の中に現れている。また、リンゴについて「本物は色も単色ではないことがよく見て再認識した」「幼児にリンゴを描いてと言われて描いたものはマンガのようで間違いを教えてしまうような気がした。どんなものでも細かい観察が必要だと思った」と再認識できたものもある。そして、他の果物についても、「桃は思っていたものとかかなり違っていた。全体的にアニメっぽくなっていた」「バナナは特徴を一つ掴むぐらいの絵だったものから、形もそっくりで細かいところまでもしっかり描けるようになった」と観察からその学生なりの発見を述べ、「バナナは黒いというイメージがあったが、描いてから思ったのは古いのばかり食べていると感じた」と思わぬ感想を持った学生の発見は印象的である。

### (4) 全体的な感想

「本物らしく描くのはとても難しかった」は、どの対象物についても多くの学生が感じているが第1回目のものが「マンガっぽい」という記述も目立つ。「本物を見ていかに違っていたかが分かった」「海をもう一度見て描くともっとそれらしくなっておもしろかった。本物を見たら太陽が沈むとき海全体がオレンジ色になることを知った」など、「よく見て知った」ことから新たな発見や描く

おもしろさにも気づいている。また、「自分がしっかりした感覚で絵を描くことは大事だと思う」「やっぱり意識して描くと違うと思った」など自信をもって描くことができたことも述べられている。その中で印象に残ったのは、「おじいちゃん」を取り上げた学生が課題にしたのをいったん悔やんだものの、観察して描き進めるうちに「おじいちゃんを好きになった」と述べていることは興味深い。

しかし、学生の中では「気がかりな感想」を述べているものも見られる。「うさぎ」を描いて「本物も素敵だが幼稚園などの絵としては前回のかわいらしい絵のほうかと思う」、「たぬき」では「本物を意識しないほうが楽しく描ける」、「さかな」では「実物を見ないで描いたほうがかわいい気がする」など考えさせられる感想もある。ここで言う「楽しさ」や「かわいさ」は大切な表現の内容でもある。しかし、ここでの自らの「表現」を保育を踏まえて見直し、今後、実物に出会ってどのように受けとめ表現するかについてのさらなる気づきを期待したい。また、「どう描いてよいか分からなかった」「描くことは難しい」と戸惑いや苦手意識も見受けられた。白色を使っても輪郭がなく形が判別しにくい作品や線が細い、紙の片隅に小さく描くなども自信のなさや考えすぎる傾向が見られた反面、描写表現に無頓着で投げやりになった作品もあった。こうした「表現」や「気がかりな感想」を含め、学生指導の重要な課題であると考ええる。

以上のように、学生の表現や感想からは生活体験の不足やものに対する観察力、価値観など問題点も見受けられ、幼児に対して大人の表現は幼稚で簡略したものでよいと単純に捉えるあることも考察された。また、こうした表現が今日までの生活環境を通して身に付けた傾向も見受けられた。しかし、こうした課題に取り組むことで、身近な環境に改めて目を向けることができた。また、自らの経験を具体的に事物を通して見直し、保育者としての視点と学習への方向を明確にする目安にもなっている。学生はやがて保育者となり、子どもの好奇心や探求心を大切に子どもがみつめるささやかなものに対する心の動きを把握できなけ

ればならない。その子どもの感動体験を支えたり受け入れたりすることができるためには、学生が日頃から身近なものに関心を深め、自分の内面を豊かにしていくことが大切であろう。その点においても、今回こうした機会をつくることで、学生それぞれが改めて事物に出会い、自分の表現が無意識に平面的な簡略したものになっていたことを自覚し、ものの形や色使い、バランス、雰囲気表現しようとしたこと。さらに、観察の方法やものの関わり方に気づき、様々な発見や驚き、物事への見直し、そして、感情表現までも意識する中で保育者としての在り方や学習の前向きな姿勢も見受けられた。そこで、本研究から、学生が自由に絵を描いた後に、自らが描いたものを改めて見直すことから「表現」の在り方を考えるこうした方法は有効であったと考える。

### おわりに

子どもの自由な絵画の中にも概念画が多く見られるが、保育者を目指す学生もそうした描写方法を身に付け、保育の中に取り入れようとしている傾向があった。本物や実物との出会いが子どものみならず保育者を目指す学生にも減少して学生の表現にも大きな影響があることが見受けられる。子どもが体験したものが生き生きと「自分のもの」になるには具体的で直接体験により得た感動と人との関わりの豊かさが重要である。

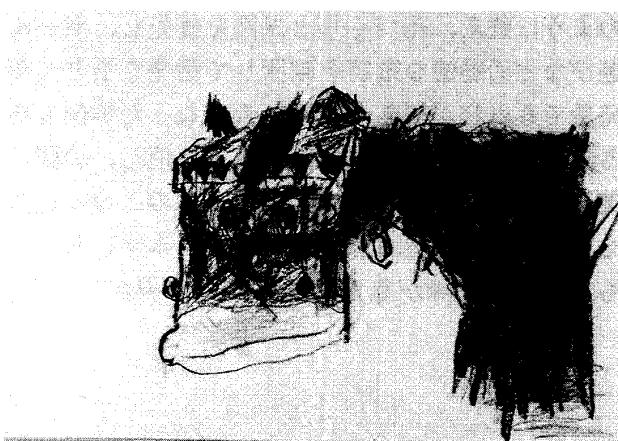
ある保育所の例によると、園行事で訪れた移動動物園の馬と飼育係のお兄さんが描いて贈ってく

れた絵に刺激され、4歳男児のK君が自ら進んで馬の絵を描いた。そこには初めて触れた生きた馬との関わりの感動や馬の世話をするお兄さんの馬に対する愛情あふれた絵による刺激がその子なりの表現で描かれている。馬の目の優しさ、頭につけられた飾りの模様や毛並みなどをよく感じ取っている。また特にK君の絵にはその時に触れた生きた馬ならではの口の動きや特徴が強調されている(図7)。子どもは遊びながらよく見たい、触りたい、してみたいというような気持ちに溢れ身近で主体的に関わってみると変化や面白さや不思議さが見え、そこで考えることや理解することでますます関わりを深めていくこと。また、子どもが自然や社会の事象などの身近な環境に興味関心を持って親しんでいるうちにそれらを生活や遊びに取り入れ、使ったり試したり大切にしたりする経験が必要であること。さらに、感じたり考えたり愛情や畏敬の念をもったりする経験を繰り返すことなどからより豊かに感じる心や表現する心を自らの中に得ていく。こうした子ども自身が実感をもちながらこころを揺り動かされて表現することの大切さなど、ここでのK君の描画から学ぶことができた。そして、身近な大人の生き方や感動、価値感などから大きく刺激されていることを改めて考えさせられる。

以上、本研究のこうした学生の表現能力の現状を把握して、マンガ世代でバーチャルが主力になる現代の環境の中で「本物」「実物」に出会う機会



図7 飼育係の描いた「馬」



愛知県公立保育所4歳男児 1998.

(当日、保育園で実物に触れたり乗ったりして遊び、馬の飼育者の描いた絵を見た後、描いたもの)

に恵まれない生活を考慮し、より体験的・具体的な学生自身の感動体験の充実に配慮することが必要であると考え。また、学生の感想に見られように、「ぞうの絵は水色で描いた時点で間違っていた」「うさぎは後ろ足で立たないし服も着ない」「ピンクでうさぎを描くことは間違い」などと単純に捉える傾向にも留意しなければならない。保育の場においては学生自らも表現者であることを踏まえ、絵画的表現における色使いや簡略した形で表現することの意味など「見ること」と「表現すること」について問い直し、子どもの発達を支える環境的存在として自分で学びながら能力の向上を図れるように指導しなければならないと考える。吉村は「歌ったり、描いたり、作ったりする活動や運動遊びなども保育者が一緒に楽しんですることが子どもの意欲を育てる最大の援助となる。」<sup>(2)</sup>と述べている。学生が保育者として成長していくためにも、子どもとの関係において日常生活の中で表現の基本になる環境への直接体験を重要視し、そこでの自らのさまざまな気づきや発見、想像、工夫、自己充実の楽しさを子どもに仲間として伝えあったり共感したりすることが必要である。そして、それを互いにさまざまな形で表現し合い受けとめ合いながら活動する経験の積み重ねから子どもとの人間関係も築ていくことができる。そこには、上手い下手で評価するのではないものへの価値感や理解力の育ちが期待されるのである。昨今の現状においては、身近に自然や動植物に触れ合う機会が不十分な学生には生活環境への配慮が望まれる。保育現場では園庭を公園のように整え、花づくりと保護を優先し、ボール遊びなど活動的な遊びを制限して活発な子どもが発散できぬ日が続き、登園拒否となった事例もある。近年では空き地も原っぱも姿を消し、公園は美しく整然とつくられ、鑑賞するものとなり遠出をしなければ自然と触れ合えない。本学においても、かつては緑が豊かで風にそよぐ柳が目立ち、

つくし、たんぽぽ、マーガレットなどの草花や雑草も豊かで、学生が四葉のクローバーさがしに熱中し、寝転んだり、遊んだりする姿があった。また、いちじく、梅、桃などがその香りと共に身近に移り行く季節を写していた。保育を志す学生の生活の中には、季節感のある雑草や草花、花や実をつける樹木、そして、そこによってくる小さな虫や小鳥などに自然に親しめることを大切にしたい。日常の中のちいさな感動や発見に目を向ける体験の積み重ねが、子どもと喜びの共有や共感ができる保育者の育成につながると考えることから、「整える」「造る」よりもできるだけ自然のままの環境を大切に、それを楽しめる生活態度を育みたいものである。

## 引用・参考文献

- (1) 大村政男、岡田洋子、西野泰広編 「乳幼児発達心理学」 福村出版 1988. p52
- (2) 森上史朗編 「幼児教育への招待」 ミネルヴァ書房 1998. P111
- (3) 黒川健一編著 保育内容「造形表現の探究」 相川書房 1997.
- (4) 岸井勇雄、小林龍雄他編 「表現Ⅲ 造形的表現」 チャイルド本社 1990.
- (5) 岡田正章、千羽喜代子他編「現代保育用語辞典」 フレーベル館 1997.
- (6) 森上史朗、高杉自子、柴崎正行編 「幼稚園教育要領解説」 フレーベル館 1999.
- (7) 森上史朗、大場幸夫他編 「最新保育用語辞典」 ミネルヴァ書房 1994.
- (8) 文部省 「幼稚園教育要領解説」 フレーベル館 平成 11.
- (9) 大塚忠剛編著 保育内容「領域 表現」北大路書房 1992.
- (10) 平井信義、岡田正章編集 「保育学大事典」 第一法規 昭和 58.

## (資料) 学生の感想

- 動物 ・自分が見てきたものを表現するのは難しい。前回は適当に描いたのでどんなふうに描いたか忘れたが今回は苦労した。毛がある動物は難しい。
- ・どうしても絵を描けといわれると現実離れしたマンガチック的な絵になってしまう。しかし今回実際のもを見てみると全然違っているのが分かった
  - ・図鑑を見て本物に近づこうと描いて見て最初の絵はマンガみたいで全然違った。これからはいろいろ観察して描きたいと思った
  - ・動物など立っていたものが座っていたり毛も細くなっていた。形も微妙に違ったり色もリアルになっていた
  - ・前回よりもみんな本物に近くなった。動物を描いた人が多かったが2本足で立っているうさぎの絵などがなくなった実物を見て色の使い方なども違ってきたと思う
  - ・前回木は丁寧に描いたので本物とあまり変化がなかったがうさぎと熊は本物とは違っていた。特にうさぎの耳は顔にくっついていることが多いということを見つけた
- ライオン ・マンガチックでも気にしなかったたて髪を今回は意識して怖いイメージを出せた
- くま ・イラストと本物の絵はまったく違うと思った
- ・イメージで描くのと本物を見て描くのは全然違った
  - ・図鑑を見たら木も熊もいろんな色があって表情も険しかった
  - ・かわいい熊からかっこいい熊に変わった
  - ・最初に描いていたものは自分の中でオリジナル化したものだった
  - ・2本足で立っていた動物からその動物そのものの立ち方になった
  - ・色使いがひたたくから毛のように塗ったり一色でなく同系色を使い人形っぽくなくなった
  - ・どんなに写真などを見ても立体感が出せず難しかった
  - ・前回の絵より今回のほうが実物に近づいている。クレヨンの使い方が変わっている
  - ・本物らしく描くのはすごく難しかった。顔、体の大きさのバランスなど思っていたのと全然違った。いつも私が描いている絵は本物と全然違っていた
- いぬ ・体や目など全てが丸くアニメっぽい絵から家の飼犬を見てきたら体の丸みや目の雰囲気がいよいよ本物に近づいた
- ・前回描いたものはマンガっぽいものばかりだったが今回は本物に似ているものばかりで子どもに真実を教えられそうな気がした
  - ・愛犬をじっくり観察してきたが見てきたつもりでもあまり上手く描けなかった。前回描いた絵は実際の犬とは違った
  - ・生きているものを描くのは難しい
- ねこ ・直接さわって遊んできたのに忘れてしまいトラ模様だったのが描けない。動物は難しい
- ・描いていて色が混ざって汚くなった
  - ・意識してじっと観察したら細かいところまで見えた。例えばねこはヒゲがたくさんあって目の上にもヒゲみたいなものがあるなど
  - ・細部まで描くことができた顔や体の構造も前とは違う
- 牛 ・前回と比べて本物の牛になった。本で牛を調べたのでそれが役に立ったと思う。調べる前のは全く牛ではなかった。本当の牛を知ることができてよかった
- キリン ・前回まつ毛、体の模様がただの丸など本物とはまったく違った
- ・前回のものは全てがマンガ化されていて省略されているところが多かった。色も目立つ色やかわいい色を使っていたが実際はもっと暗い色だったりした
- ぞう ・今まで親しみをもち、知っている動物でもあまりきちんと見ていなかったことや細かいところがどうなっているか分かっていなかった
- ・象は全体的にシワがあって潤いがなく乾燥していた。もう少し足は長かった。前回の絵は水色で描いた時点で間違っていた。本物は特に目などこの絵よりもかわいい
  - ・本物を描くのは難しかった。絵は苦手なのでどうしようかと思った
- うさぎ ・自分の中でイメージを勝手に考えて描いていた。空想つくりもの
- ・色も思い思いでイラストみたいだったものから立ち姿や色も実物に近づいた
  - ・前回のものは擬人化されていて本物のものとは大きく違っていた

- ・実物を見て描いたものはやっぱり上手い
- ・難しい課題だった
- ・ウサギをいつからピンクに描いてたんだろうと思った
- ・本物を見たのは小学校の時が最後なのでまた動物園でも行こうかと思う
- ・ウサギはいつも正面から平面的に描くけれど今回はリアルに横から立体的に描くとすごく難しい。描けそうで描けない。何か違和感がある
- ・前回のものはみんなマンガのような絵だった。実物は分かっているけど実際描いてみるとどこか手抜きになっている
- ・前回とは全然違うものになったがあれは絵本などに見られるものだけど実際にはないものだった
- ・うさぎはモコモコしていて後ろ足が太かった。後ろ足では立たないし服も着ない
- ・今まで自分で描いていたウサギとは全然違って。ちゃんと調べたから本当のうさぎがわかった。ふわふわしてとても暖かそうでかわいいうさぎでした
- ・前回描いたウサギさんみたいに立って歩かないんだ。後ろ足で立ってるところ、首があまりないように描けてしまった
- ・本物を見ていかに前回描いた絵と違うかが分かった
- ・本物もすてきだが幼稚園などの絵としては前回のかわいらしい絵のほうがと思う
- ・本物らしく描くのはすごく難しかった。顔とからだのバランスなどが思っていたのと全く違った。いつも私が描いている絵は本物と全然違って
- ・私は絵が描けないので前回と同じようになってしまった。もっとじっくり見てくればよかった。そうすればもう少しリアルにかけたと思う
- ・難しくて上手く描けず色も寂しい
- ・自分で勝手に考えていたウサギは「表出」できちんとしっかり見てから描いたのは「表現」だったと思う。本物を見て描いたほうがリアルでうさぎっぽく描けた
- ・1回目に描いたウサギと2回目に描いたウサギとではまるで違うものみたいだった
- ・自分の中にある動物たちとの違いに驚いた。
- ・最初に描いたうさぎは立っていて全く違って。キャラクターのように描けばいいと思っていた。でもそうではなくて実物に近いものを子どもたちにちゃんと教えなくてはいけないと思うのでこれから気をつけようと思う
- ・ちゃんと見てきたのに実際描いてみるととても難しかった
- ・実際のうさぎは体が丸くピンク色のうさぎはいない。耳もピンとはってそんなに大きくない。ひげもそんなにないしネコみたい
- ・前回うさぎと人参を描いたことをちょっと後悔
- ・前回本当に軽い気持ちで描いたためまさかこんなことになるなんて思ってもおらず、すごく困った。本物を描くのは本当に難しい
- ・自分で勝手に描いたうさぎは本物とかけ離れていた。実物を描くことは難しい
- ・見てきたものを描くというのはとても難しいと感じた。それに思い出しながら描いていてもやっぱり自分の想像の絵になっていた気がする
- ・自分が思った通りに描くのと実物を見て忠実に描くのではかなり違って実物の通りに描くのは難しい
- ・前回あんなに絵をたくさん描かなければよかったと思った。星を見たけれどどう描けばいいか分からなかった。想像して描くのと本物を見てから描くのとだいぶ絵が変わると思った難しい
- さる・前回はマンガみたいだった
- たぬき・イメージだけでは絵にできない、本物を意識しないほうが楽しく描ける
- きつね・普段「こんなかな」と思いながら描いていた絵が実際の動物や虫の形とは全然違うことに気がついた
- ・今まで周りのものを適当にしか見ていなかったからマンガっぽくなってしまふ
- ・もっとものを観察する癖をつけないといけないと思った
- パンダ・絵は思ったより難しい
- さかな・自分がイメージしているものはすごく曖昧でマンガチックなことが分かった。観察を前回は何も考えずただ何となく描いたが実物を見て描くとすごく悩んだ。でも実物を見ないで描いたほうがかわいい気がする
- ・魚はよく食べるので何も見ないで描けると思ったが描けないことが分かった。図鑑で見たらまったく違っていたので驚いた。普段見ているものにも観察することの大切さが分かった

- くじら・よくしることが大切だと思った
- タコ・タコは気持ちの悪いイメージがあったので気持ち悪くした
- 蝶・絵は汚くなったが本物のチョウチョは私が思っていたものと違って黒が多かった。自分の思っていたものと本物がこんなに違うとは思わなかった
- 蛾・ちょうちょがいなかったので蛾を見てきてしまった。蛾はザラザラしていて羽根もザラザラしていた。足も生えていて驚いた。ちょうちょや花なんてとても簡単に描いていたけど実際は難しかった
- カエル・少しはカエルっぽく見えると思うがまたこじんまりとした絵になってしまった
- アヒル・黄色いのは一応アヒルだが下敷きに描いてあったものを描きたかったから黄色で描いた。湖を描いたがヘドロで汚かった。あまりよく見てこなかったから分からない
- ・前回のものは自分で想像したり浮かんだアヒルで図鑑を見てみたら全然違っていて驚いた。本物をよく見ていないことに気づいた
- 人・体の向き、動きの変化、一目で何を描いたかが分かりやすくなった
- ・なかなか描くということは難しいことだと思った
- ・前回描いたものに比べると丁寧に描いてあると感じる
- ・実物のように描くのはとても難しかった
- ・自分が思い込んでいる動物の絵と本物とではとても違いがはっきりしていて本物はなかなか絵にするのが難しくて大変だった
- ・おじいちゃんなんて描かずかわいい動物にでもすればよかった。でもおじいちゃんでもかわいいからいい。写真まで見てきてしまった。おじいちゃんが好きになった
- ・本物を見たら髪型がずいぶん違ったので困った
- 花・自分の中で思ったように描いたが本物を見てきたら自分の中で思っていることと本物とは違うのだと思った
- ・花も単に花ではなく本物の花はいろんな種類があるので大変
- ・花卉はザラザラしていた
- ・本物を見ていかに初めの絵と違うかが分かった
- ・自分のイメージと本物を比べるとどれだけ単純な想像だったかと思った
- ・前回なんでもいから描くように言われて描いたものは自分が描きやすいように省略した略図でしかなく実在のものではないということに気づいた。今回描いたものはより複雑でリアリティーがある
- ・普通に落書き程度に描くのと本物を見て描いてみるのではだいぶ違う絵になった。花でもいろいろな形がある
- ・家に咲いていたお花をボラロイドで撮ってみて植木鉢ごと描いてみた。前回描いたものより花らしく見えるような気がする。色の使い方が工夫できたと思う
- ・前はマンガっぽく描いた。今回は本物っぽく描いた
- 向日葵・ひまわりやチューリップなどは今までいかにマンガ的に描いていたかが分かった。ひまわりは花の中は網状にしてチューリップは3つ割りに描く。改めて本物を見てみると違いがすぐ分かった。今までいかに適当にものを見ていたかに気づいた
- ・ひまわりは花卉が大きくて中の種のところもシマシマではなかった
- コスモス・絵が実物に近づいてそのものの動きや表情が豊かになっていた
- ・実物を見て描いたりするのは難しかった。最初描いた絵は茎がついていなかったが本物にはついていた。いつも自分が描いている絵は間違いが多いと思った
- ・葉一枚一枚描くのが難しい。花卉の部分もよく見ると気持ち悪い
- すすき・自分の想像したものから本物に近い絵が描けた
- ・前は太ざっぱに描いてしまったが今回は細かいところまで描いた
- ・前回は少しイラストみたいに描いてしまったがこれでは子どもたちに花と言うものを教えられないと思った
- チューリップ・実際のチューリップではなくて本を調べたが葉や茎が白っぽい色をしていた。こうやって描いてみると難しかった
- ・チューリップを図鑑で見えてきたがいろんな種類のチューリップや花の色が1色ではないことが分かった



- ・自分で描いたものとだいぶ違った。チューリップってみんな同じに描くから不思議
  - ・初めマンガの花見たいに描いたのでどうすればいいのかわからなかったがマンガの花にもモデルというものがあると思って図書館に行って図鑑を一応見たがやはりマンガみたくにしか描けなかった。色が描いてみると難しかった。でも1枚目と2枚目の絵は全然違うと思った
  - ・チューリップの花弁が全然違っていた。何枚も重なるように出来ていた。葉も結構細くて長かった
  - ・前はマンガっぽく描いたが今回は本物っぽく描きました
  - ・前はチューリップに目を描いてしまった。本を見て葉がくねくねしていることを知った。前は平面に描いていることに気づいた
  - ・前はなかったが花弁がちゃんとある。調べた本ではチューリップはみんな花壇などの土の中から生えていたから今回はちゃんとそのように描いた
  - ・チューリップの輪郭が分かりにくかったので少し濃く描いてみた
  - ・実際のように描こうとするとなかなか難しかった
  - ・花は何枚かの花弁からできている
- い も ・焼き芋が食べたい季節になったので描いた。落ち葉を描くのが難しかった
- く り ・前回は秋といえば何かと考える思いついたクリを描いた。クリだけでは寂しかったので花も描いた。今回はクリを観察してから描いてみると前回よりもおいしそうに描けた。花は花やさんで観察してバラを描いた
- す い か ・想像していたスイカとちゃんと見たスイカとはちょっと違っていた
- ケ ー キ ・実際本物を見たら想像して描いたのとは全然違っていて前回の絵よりも本物のほうがおいしそうに見えた
- 果 物 ・果物は丸いのでそれを表現するのは難しい
- ・みかんはまだ緑でスイカはもう売っていなかった、りんごはおいしかった
  - ・想像して描くのと本物を見て描くのではだいぶ違うと思った。本物らしくちゃんと描けるようになっていきたい
  - ・ももは思っていたものとかなり違っていた。全体的にアニメっぽくなっていたのでリアルにしてみたリンゴが上手く描けなかった
  - ・みかんとリンゴはよく見ているが納豆は難しかった
  - ・見たものを実際に描くのは難しい
- ぶ ど う ・立体的になった
- ・前に描いたものよりもおいしそうに見える
- バ ナ ナ ・特徴を一つつかむぐらいの絵だったものから形もそっくりで細かいところまでもしっかり描けるようになってきていた
- ・バナナは「黒い」というイメージがあって描いてから思ったのは黒が濃いというのと「黒い」というイメージから古いのばかり食べていると感じた
  - ・バナナというのはありきたりすぎて返って難しかった。前回とあまり変わらなかったと思う
- り ん ご ・思った以上に上手く描けた
- ・リンゴがものすごくおいしそうに描けた。アルバイトでレジを打っているので家とスーパーで宿題が出来てラッキーだった。絵を描くのって楽しいな
  - ・本物を見たが今のリンゴはこんなにも赤くキレイではなかった
  - ・本物は立体的、色も単色でないことがよく見て再認識した
  - ・リンゴをよく見たら真赤ではなくまだ色が変わっていない黄土色っぽい所や汚れて黒っぽいところもあった
  - ・幼児にリンゴを描いてと言われた時に描いたものはマンガのようで間違いを教えてしまうような気がした。どんなものでも細かい観察が必要だと思った
- メ ロ ン ・もっときちんと観察すれば良かった
- み か ん ・突然描くように言われて描いたものは現実のものを見たとき略されていたりアニメ化(ゆず)されていることが多いと感じた。「本物らしく描きなさい」と言われていたらまた違っていたと思う。子どもへのことばがけの大切さを感じた
- い ち ご ・実の部分はきれいな曲線ではなくボコボコしていた。食べたいと思ったら本物に近い絵になったと思った
- イチゴ人間 ・いちごのデコボコ感を出すのはすごく難しかった。本物に近づけて描いたらすごく恐くなってしまった
- ソフトクリーム ・絵は苦手なので苦労した。ソフトクリームとバナナと肉は大好きなのでいっぱい食べたい。ソフトクリームは人に伝わると思うが肉は分からないと思う

- 景 色 ・ 実物には前のような絵はなかなかない
- ・ 前回の絵は実物を見ていなかった分描けている部分やリアルでない部分がある
  - ・ 自分がしっくりした感覚で絵を描くことは大事だと思った
  - ・ 太陽も草も何かの本で見たものを描いたが本物は色も違うし空と地面の境界線も全然違って、絵で描くことの難しさがわかった
  - ・ 海がメインになる予定だったが本物を見たら夕焼けを描きたくなかった
  - ・ 空と太陽は実物に似てきたと思う。実物のように描くのはとても難しく感じた。他人の動物はとても違いがはっきりして今回のもののほうが実物に似ていると思った
- 海 ・ 前日見に行った海をもう一度見て描くともっとそれらしくなっておもしろかった。本物を見たら太陽が沈むときは海全体がオレンジ色になることを知った。蟹も焦げ茶で海の色も緑かかっていた。本物とはずいぶん違っていろいろと考えさせられた
- 太 陽 ・ 空と太陽は実物に似てきたと思う
- ・ 太陽がやはりおかしいと思った。絵に現わすのは難しい
  - ・ 前は自分のイメージで描いていたが実際のものとはかなり離れていた
  - ・ 太陽は見るのにまぶしかった
  - ・ 一番難しかったのは太陽だ。一度自分の目で確かめたい
  - ・ 太陽の色はまぶしくて分からない
- 空 ・ いつも好きで見ているはずなのにいざとなると描けなかった。自然は難しい
- 星 ・ 本物は丸かった
- ・ 星が少なかった
- 雲 ・ 雲の白さをどういうふう描こうか悩んだ。水色を使ってしまいがちだが雲は白色なので白を使った
- ・ 雲は描くのが難しい
  - ・ 雲は形がないのに等しい
- 雷 ・ 雷は昔の記憶で描いた
- 家 ・ 家が立体になって木ノ実もできて暖かい家の感じが前よりも出せた
- 木 ・ 前回と今回の違いは使った色の種類、木の枝
- ・ 葉の微妙な色を出した
  - ・ 木一つでもこんなに違うので先週の絵を見ておもしろかった
  - ・ 前回のものとこんなにも違いが出てしまうのにびっくりした
  - ・ 友達の家で見てきたがもっと立派だったと思う(柿の木)
  - ・ 枝まで細かく陰まで描いた。前はマンガっぽい
  - ・ 本物はもっとリンゴの実がいっぱいになっていておいしそうだった
  - ・ 木の葉が難しいし枝も複雑。前は何も考えずただ思いつきのままに描いたので現実ではありえないような絵だった。やっぱり意識して描くと違うと思った
  - ・ 前回のものに比べるとリアルになっていた。かわいらしい感じがなくなった(クリスマスツリー)
  - ・ 前回のものに比べると明らかに違うのが分かります。日頃から見ているものなのに見ているようで全然見えていないことがよく分かりました。色や形はよく似ていても細かなところまでは注意してみていないと思いました
- 車 ・ 前はただ漠然と車に乗っている絵を描こうと思ったもので色、形や何処を走っているかを考えていなかったが今回は車種を決めそのフォルムに重点をおいて描いた
- ・ あんまり動かなさそうな車になってしまった
- キティー ・ 絵などいろんなものがあって困った
- アンパンマン ・ アンパンマンはちゃんと服が決まっていた
- ドラエモン ・ 実物を見ていないと自分の勝手な想像で描いていて実物とずいぶん違うとわかった
- ・ 描くのに相当困ったが一応アニメなどを見て研究し表情を豊かにし立体的に描いたつもりだ
- ペンギン ・ マンガ化された動物より本物のペンギンを見て描くほうが難しいと思った
- 宇宙人 ・ 昔のXファイルなどを引っ張り出してきて見た。本物はもっと恐そうだったがあまり上手に描けなかった
- 仮面ライダー ・ こんな所はこうだったんだなど新たな発見があった

オバQ ・マンガ喫茶に行くなど本物を見るのが大変だった。白だとみえないので青にしてみた。Qちゃんってこんなにかわいかったかかしらと思った

ポストベットももちゃん（熊のぬいぐるみ）

- ・2回目は似せて描こうとするので力が入ってしまって前のより似てないかも知れない。本物が実物のものでないことも少し戸惑った

天使 ・天使は見たこともないし資料も全くアニメチックなものばかりだった。きっと天使は人それぞれの想像の世界のものだと思うので人によって全く違うものになる。私が思うに本当の天使はこれだ。星は丸だった。創造の世界と現実とは全く違うと分かった

- ・前回花の周りで飛んでいた天使さんは残念ながら実物を見られなかったので省いた。決して言い訳ではない

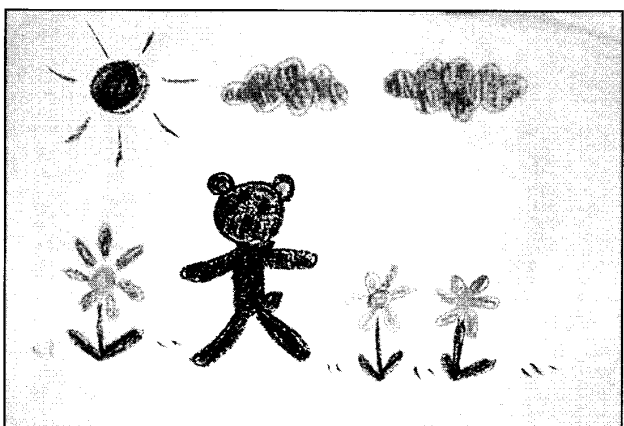
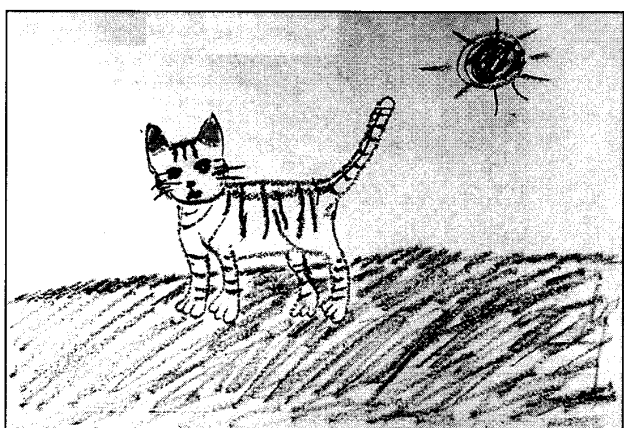
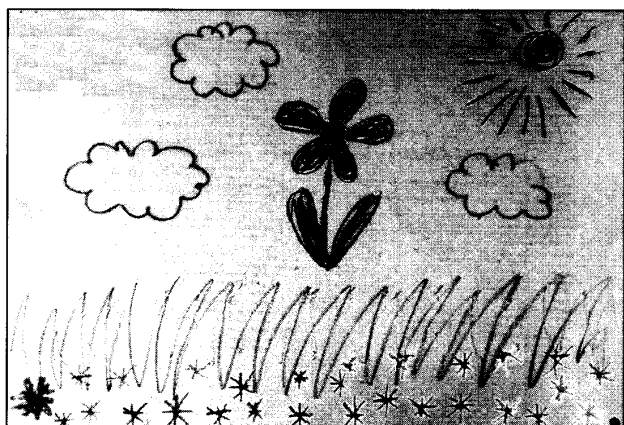
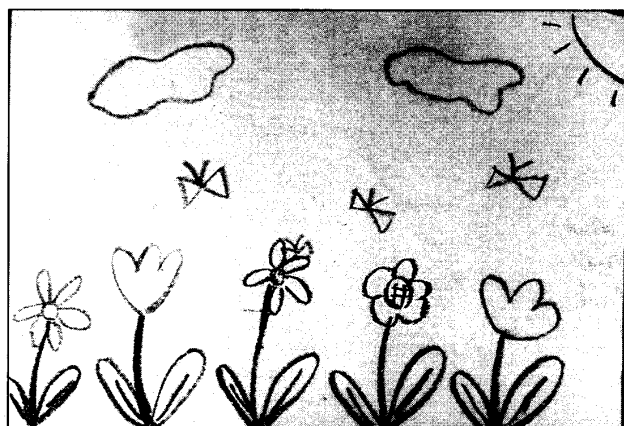
雪ダルマ ・立体的にしようと心がけたこれから成長していく子どもたちに出来るだけ本物に近い絵を見せることが大切なのだと思う

その他 ・高校の時から好きな絵で何気なく描いたので本物を見てこいと言われて困った（テーマなし）

- ・どの人の絵を見ても線が細くなっていた。色使いも原色などわりとはっきりとした明るい色が多かったが実物を見てからは落ち着いた色彩になっていた
- ・前回の絵と違って見んな細かいところまで描いていた。子供たちに伝えるうえで自分は本物をしっかりと知りそれを描けるようにすることが大切だと思う。自分がまずそれを知らない子どもたちに教えられない気がした
- ・みんなの絵を見てその描いてあるものがそれらしくなっていた。形が変わって線をつけ加えたりするだけで全然違ってみえた
- ・前回の想像で描いた絵と観察してから描いた絵とはずいぶん違うと思った
- ・すごくみんなリアルに変わったと思う。細かいところまで見ていた。リアルだと絵のイメージが全然変わった

(資料) その他の作品

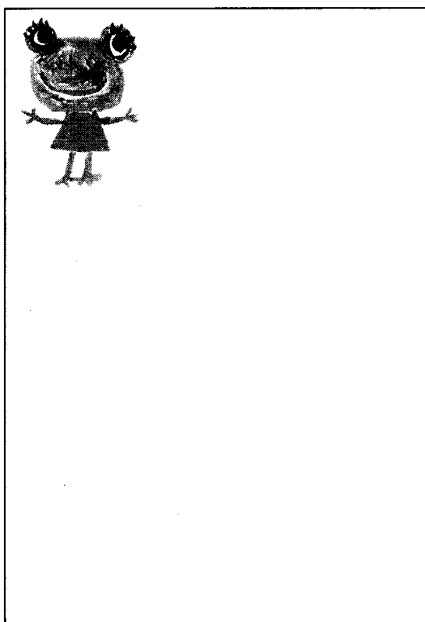
第1回目



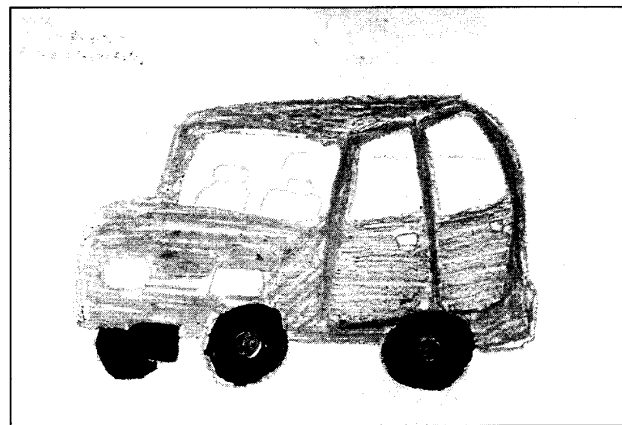
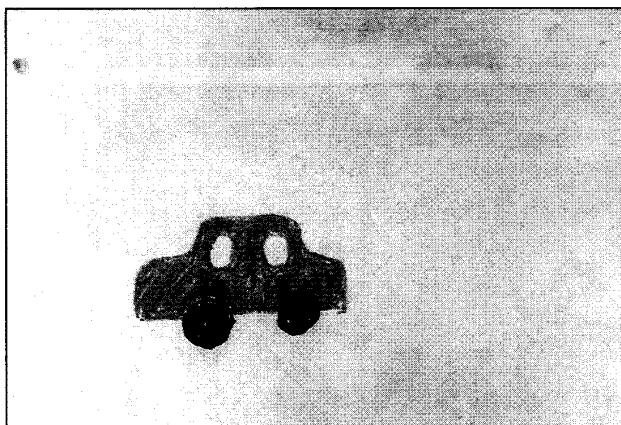
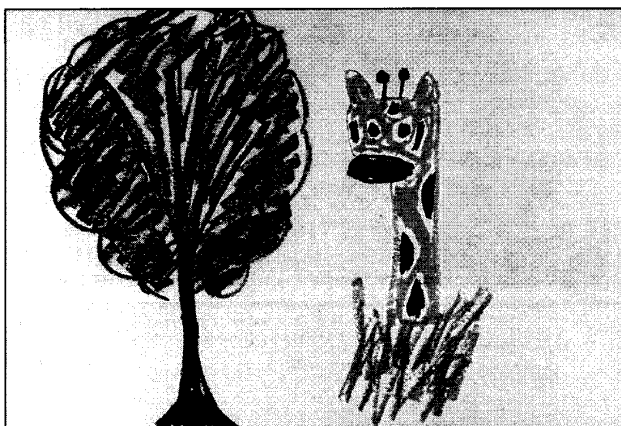
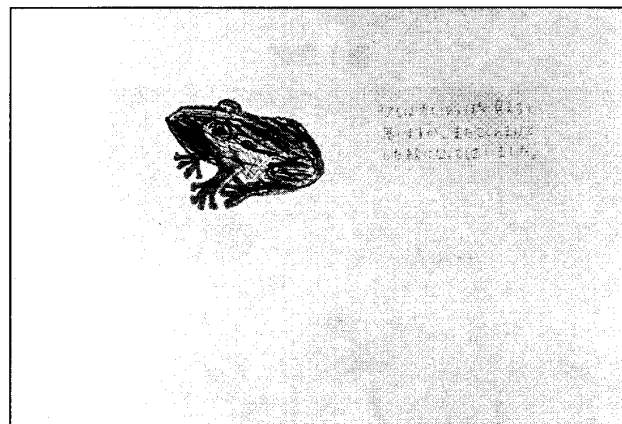
第2回目



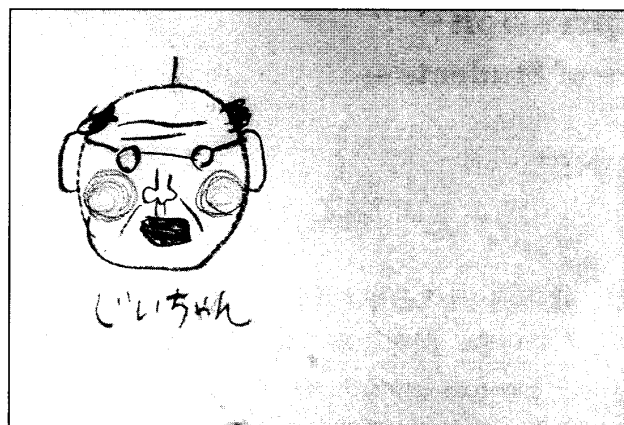
第1回目



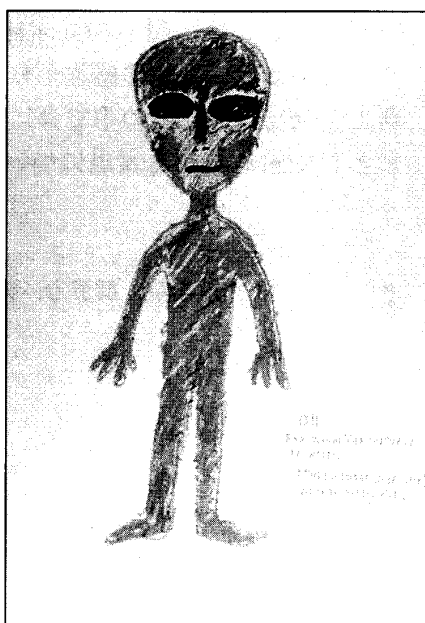
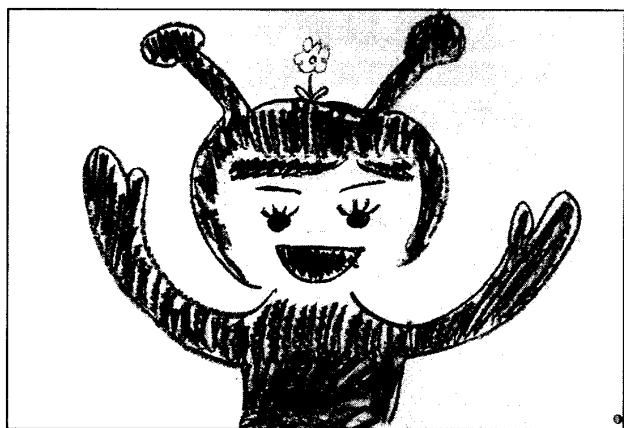
第2回目



第1回目



第2回目



## Image and Expression — Through the Picture of Students —

Rikiyo NAGANE\*

社会変化の影響は保育者を志す学生にも及び、現実的・具体的なものに触れる機会は減少し、アニメを好みバーチャルの世界に親しんでいる。保育現場では、保育者自らも表現者であり、子どもたちが生活し刺激を受けているあらゆる教育環境における保育者の感性や表現能力の豊かさは重要である。また、そうした表現は子どもの発達や実際の事物を捉えた上での表現であることが望まれる。そこで、学生の描画を取り上げ、その対照物について、実物観察前後の表現の比較と感想文について考察し、学生の事物を捉える視点や価値観、保育者としての表現能力などを見直すこととした。この方法は、表現の特徴を絵画という目に見える形で比較でき、その違いが発見しやすいことから、学生にとっては実物と自分の表現や事物に抱いていたイメージとの違いが再確認でき、自らの表現能力の現状把握と事物や保育の視点を問い直す機会となった。また、学生の感想からは、生活の中での体験や観察力の不足、事物に対する新たな発見、無意識の中で身に付けていた物のイメージや表現方法への気づき、保育者として求められる表現についての自問自答や価値観の見直しが見られた。

キーワード：生活環境、観察力、表現能力、保育観、学生の気づき

---

\*Nagoya Ryujo (St. Mary's) College